名古屋学院大学教職センター年報　第 4 号　pp.31-42

〔論文〕

外国人児童生徒に対する進路指導・キャリア教育

――特別活動，総合的な学習との連携の可能性――

犬塚文雄*・天野幸輔**

名古屋学院大学外国語学部

要　　旨

増え続けている外国人児童生徒が，日本の社会や学校制度になじみ，自分自身の個性を発揮しながら自分の将来を切り拓きながら自立して生活できるように支援する上で，授業，殊に特別活動と総合的な学習にどのような可能性があるか，事例を参考に提案する。外国人児童生徒の多くが自分の意思とは関係なく，仕事などの保護者の都合で来日している点からも，学習意欲を高めたり，勉強していく目標ややりがいを感じられたりするような仕組みが必要である。既存の授業を，外国人児童生徒に対する進路指導やキャリア教育の視点から見直す一考察である。

キーワード：外国人児童生徒，特別活動，総合的な学習，進路指導，キャリア教育

Career guidance / Career Education for Foreign Students

――Possibility of Collaboration with Extraclass Activities and Comprehensive Learning――

Fumio INUZUKA, Kohsuke AMANO

FACULTY OF FOREIGN STUDIES

Nagoya Gakuin University

---

*名古屋学院大学外国語学部　　**岡崎市立本宿小学校 Motojuku Elementary School

発行日　2020 年 2 月 28 日

1. 問題の所在

外国人児童生徒の保護者にはその子どもへの日本での就学の義務はないにもかかわらず，2017 年の学校に在籍する外国人児童生徒数は，小学校に約 59094 人，中学校に約 23051 人，義務教育学校に 326 人，高等学校に約 9614 人，中等教育学校に 151 人，特別支援学校に約 897 人など，約 93133 人となっており，年々増加している[2]。そのことに対する様々な施策により，条件が急ピッチで整えられつつある。まずは義務教育段階の学校における外国人児童生徒への教育に焦点化するならば，どのような課題が見えるだろうか。

高校進学した外国人生徒の日本語能力の調査[3]によれば，通常授業が理解可能な生徒は 54.8%で，45.2%は通常授業の理解に課題があり，そのうち全日制高校では 34.1%，定時制高校では 66.4%に，通常授業の理解に課題がある。つまり半数が通常授業の理解がままならないことになる[4]。もしかしたら理解度が高いほど全日制へ，低いほど定時制へという傾向があるかもしれない。日本の学校制度どころか，日本文化さえ全く知らないまま保護者の都合で来日する外国人児童生徒がいることに鑑みると，義務教育段階では日本語指導の充実と，日本語習得への意欲付けや自分の個性に気づき，日本で自己を実現していく方策を学ぶようなキャリア教育のあり方が問われると言えるだろう。

では言葉を理解できない，あるいは十分に理解できない児童生徒に，その後の日本滞在を見越して進路指導やキャリア教育を行う場合，個別の面談以外で効果を上げることが期待される授業の枠組みとは何だろうか。不十分な日本語能力で，異国である日本とその社会の仕組みを知ったり，自分のこれまでを振り返り，将来の自分像を見据えていったりする授業とは，どのようなものだろうか。異文化の中でこそ気づき，開発できる自分の能力を引き出してくれる授業として，何が必要なのであろうか。

その答えの多くは特別活動と総合的な学習の中にある。本稿は，その一端を明らかにしていくことを目的としている。そもそも（個人）面談や個別指導には膨大な時間を要する。さらに通訳を介するとなると，単純に倍の時間が必要である。また日本語指導のための十分なスタッフがそろいにくい問題もある。無論本人の意欲にもよるが，日本語能力の進歩がなかなか望めないケースもある。こうしたことから外国人児童生徒を担任することは「めんどう」「先が見えない」「気がのらない」といった声をよく耳にする。そこで学習指導要領にのっとった，既存の授業を援用して外国人児童生徒への進路指導，キャリア教育を実現する方策を見出したいのである。これまで積み上がってきた授業実践や事例検討は，外国人児童生徒の進路指導やキャリア教育にどのように資する可能性を秘めているのかを解き明かす大きなヒントを，間違いなく与えてくれることであろう。具体的な事例を参考に，提案を行っていきたい。

本稿ではまず外国人児童生徒やその担任教師が抱える問題を確認し，具体的な事例から特別活動や総合的な学習の授業実践を通じてその解決や問題の緩和となる方策を探り，今後の課題を明らかにすることとする。

2. 特別活動と進路指導・キャリア教育

文部科学省による学習指導要領（平成 29 年告示）には，新しく「学級活動（3）」がキャリア

教育として加わった。今後は具体的な実践研究が待たれる。ここではそれ以外の実践を想定して論を進める。

2.1.スモールステップで決められた仕事を通じて集団に貢献することー小学校，そして障がいをもった外国人児童生徒ー

小学生，特に低学年生や，特別な支援を必要とする外国人児童生徒のキャリア教育には，どのような可能性があるのだろうか。それには特別活動の重要性を論じることで応じたい。

それは例えば，学級での様々な係活動や学校全体の委員会活動などを通じた，スモールステップでの成功体験が挙げられる。そもそも言語の理解度が低い点では，特別な支援を必要とする児童生徒は，その支援の内容について国籍にかかわらず共通な部分が多いかもしれない。おそらくはそれを支えるユニバーサルデザインの授業形態や活動支援の方策にも同様のことが言えるだろう。

国民性や個々の家庭の価値観によって，特別な支援を必要とする外国人児童生徒が学校を離れてからどのくらいで社会に出るかは異なってくるが，いつかは自立に向けて学校外の社会の枠組みで生きていくことになる。それまでに学校がまず考慮すべきことは，その児童生徒に人とのかかわりあいの中でいかに自尊感情をつけ，自己有用感を高めるか，という点であろう。それには学級内の様々な係活動から始め，やがては学校全体にかかわる委員会活動のようなより大きな枠組みで人の役に立つ体験を重ねることであろう。自尊感情を高めるには長い時間が必要である。自己有用感を高めるには，様々な場の設定が必要である。

係活動のよいところは，言葉を必要としない上に決まったルーチンをこなせばよい仕事から，その場で即興的に考えて動いて問題を解決しなければならないことまで，様々な種類の活動が学級に存在する点である。まずは決まったルーチンを覚えるところから始め，慣れたらよく似た仕事を経験させるのもよいし，少し難しい仕事に進ませるのもよい。

また教科の学習係のように，学期中，または年間通して任される仕事から，学校行事の実行委員や話合い活動の板書係など，様々な質のごく短期の仕事まで存在するところも，小学生や特別の支援を必要とする外国人児童生徒の自己有用感を高めるためのスモールステップを準備する上で都合がよい。係活動を行っている姿においては，学級内のどこに学習障害の子どもがいるのかわからないことがある。なすべきことがはっきりしていて，それを確実に実行していく姿には何らかの自信がともなうのかもしれない。

2.2. 特別活動による日本文化理解—中学校、学級での活動，体験を，新たに属する社会への準備にー

学校現場では「行事で子どもを育てる」とよく耳にする。学校教育における行事が，学校文化であるとするなら，その活動のエッセンスのどこかには日本の文化を反映した部分が含まれているのだろう。

中学校を卒業すると，ほとんどの生徒が自分で選択した新しい社会，新しいコミュニティに所属しなければならない。中学校課程の途中で転入してくる外国人児童生徒は，中学校という場に慣れるころには，すぐに訪れる卒業後の進路に対して，学習面以外でも準備しなくてはならないのである。しかしこのことは実現が大変難しい。本人の意欲によるところが大きい上に，学級担任一人の支援では到底無理である。

そういった状況でこそ，特別活動の意義が重視されるのである。なぜなら学級の様々な活動を通じて，また学年の，学校全体の活動を通じて，社会の仕組みを学んでいくことにもなるからである。合唱やスポーツの行事にも係活動は不可欠である。つまり行事の成功や円滑な運営の実現に向けた仕事が係活動，ということになる。できればその仕組みのみでなく，価値観においても，社会と学級，社会と学年・学校のコミュニティとのギャップが少ない方が，外国人児童生徒の学習の場としてはふさわしいのかもしれない。その意味では，継続的に行われる行事や係活動だけではなく，時期的なもの，例えば生徒会役員選挙とその実行委員・選挙管理委員といった活動も意義深いであろう。

そうした活動の中では自然と会話が生まれる。その点も担任教師一人からの説明や講義で終わらせない，生徒間の学びへとつながるのだろう。もしかしたら楽に仕事をこなすコツの伝授があったり，個人の勤労観にあたるものや活動を遂行するにあたっての配慮事項について，ごく自然に活動中に，しかも日本語を介さずに相互伝達が行われたりする。

また外国人児童生徒の内面では，自国での活動との比較や新しい枠組みでの人とのつながりの確認，意義付けなど，自分との対話がなされるであろう。自分と向き合うこと，それはつまり自分自身のキャリアを確立していく過程に他ならない。

中学校段階では，小学校と同じ係活動であっても，社会を模した活動する者のつながりの深さや関係性，活動から自身への振り返りにつなげていく指導を行うことが大切であろう。通訳を介さなければならない場面もあるだろうが，その際にはぜひ，通訳その人の勤労観やキャリア，その背景となった学校体験を語ってもらうと，キャリア発達に効果的なのではないだろうか。

3. 総合的な学習と進路指導・キャリア教育

自分の所属学級で，日本語が十分に理解できない外国人児童生徒であっても，総合的な学習をともに行うことは大変意義がある。その理由はいくつか考えられるが，例えば学習方法と学習内容について述べるなら，以下の２つの点を挙げたい。

3.1. 学習方法と外国人児童生徒の学び

まず総合的な学習においては，通常の教科の授業と異なる学習方法を用いることがあるため，他の級友とのリレーションが深まる可能性がある点である。少人数の班活動や，興味・関心や追究テーマが似通った児童生徒による図書館での資料探し等がそれに当てはまるだろう。自分の意思とは関係なく，いつもと違う仲間と，違う場所で協力せざるを得ない状況が生まれ，日本語の習得にもおそらくはよい効果が得られることであろう。

その二つ目は，言語を必ずしも多くは必要としない，直感的な方法が用いられる可能性である。カメラによる取材や下調べの活動や映像による学習成果のまとめ，コンピュータを用いた学習がそれに当たるだろう。コンピュータなどは,外国人児童生徒の方が上手かもしれないし，少なくとも利用手法が異なったりすることで，級友に言葉を介さず何かを提案できる可能性を保障する。そのことで，存在感や達成感を得ることができるだろう。

3.2. 別クラスに散らばった外国人児童生徒の別グループ化

しかし前述のことは，当該児童生徒本人のかなりの努力と忍耐を要することは想像に難くない。特に 1 つのテーマで 10 数時間をつぎ込むような大がかりな総合的な学習では，やはり理解に言語能力が不可欠である。

では日本語でのコミュニケーション以前に，日本語がほとんどわからない児童生徒には，総合的な学習において，どのような形で，どのような学習を進めることが適当だろうか。外国人児童生徒ならではの追究テーマをもち，発表・発信することで存在感を増すことができるような学習とは，一体どのようなものであろうか。

まず学習形態であるが，学年で総合的な学習の時間割を統一することで，各クラスに散らばった同じ言語圏や同じ出身国の児童生徒を集めて，所属学級と似たテーマ，または違った独自のテーマを追究させることが考えられる。例えば，近年人気のテーマに「防災」が挙げられる。これを学級が選択した場合は，外国人児童生徒も同じテーマとし，地域に住む同じ言語圏の人々や同じ出身国の人々に発信することを目的に，自国語でまとめさせたり，町中にある防災標識の伝達内容を自国語で解説させたりするような取組ができれば，「〇〇人コミュニティ」で存在感が増すことになろう。一方で「福祉」といったテーマなら，もう少し切迫した自分自身の生活にかかわるテーマ設定をした方がよいかもしれない。

3.3. 追究テーマの意図的な選択

次に追究テーマである。小学校では「地域における〇〇人コミュニティ」に関する追究学習，中学校では「キャリア形成にかかわる追究学習」が必要と考えられる。なぜだろうか。

まず出身文化圏，宗教圏にもよるが，どの教会に属するかで同じ「〇〇人」であっても活動範囲が違っていることがある。例えば，どこで，どのような食材が手に入るのか，どこに行けば使用言語による市制に関する資料が得られるのか，町のどこに使用言語による標識があるのかなど，情報の共有から始めて，ぜひとも現地を教師とともに訪れる社会見学も盛り込みたい。多くの児童が「息抜きの場」とさえとらえている日本語教室での授業があるとしても，6 時間母国語ではなく，ほとんど理解できない言語での授業を受け続けるのは楽なことではない。公共交通機関の利用の仕方の学習も含めて，教室を出て学ぶ機会を先に与えてから追究していくのもよいかもしれない。

また教師の側も，「〇〇人コミュニティ」理解が深まるとともに，保護者間のつながりの濃淡であったり，キーパーソンを知ったりする機会を得られることであろう。

中学校では，最終的に何といっても卒業後の進路が大きな問題となる。進学であっても，就職であっても，日本語能力の高低が進路に大きく影響する状況はしばらく続くことであろう。

しかし例えば漢字，ひらがな，かたかなと 3 つの文字を使う日本語の難しさは世界でも有名であり，日本語習得に終始，意欲を見せ，実際に継続する生徒はごく稀である。そもそもの日本への移住の理由が，自分とは直接関係のない保護者の仕事の都合となれば，ますます日本語学習の意義を見出せないことも，ある意味で無理からぬことである。

そうであるとすれば，ぜひとも個々の生徒のキャリア形成に役立つ総合的な学習を行いたい。それは例えば，複数の社会教育施設を訪れて，そこで学べる内容の違いを追究する総合的な学習である。また例えば，市内のどこに，どのような高校や専門学校，ハローワークがあり，

カリキュラムの違いや取得できる資格の違い，必要な手続きを比較し，実際にその学校を自転車などで訪問して実際に生徒に日本語で取材をさせるような総合的な学習である。

それらはつまり，自ら日本で学ぶ意義を見出す材料を与えたり，日本で自らの個性を伸ばして生きていく方策や道筋を考えさせたりする学習なのである。ぜひ保護者にも「校外学習支援ボランティア」「見守りボランティア」などの名目で，参加するチャンスを与えたい。

教師は学習が進むごとに，「母国ではどうなのか」「同等の施設，学校とはどんなものか」「2 国の長所と短所はそれぞれどこか」と問い返すことで，そのねらいを達成する支援となるだろう。また教師の側も，とかく 3 年生の学級担任教師のみに押し付けられがちな進路指導の一助となることであろう。

4. 事例から考察する特別活動と総合的な学習

4.1. 係活動が育む自尊感情

以下では，特別活動や総合的な学習を通した外国人児童生徒の変容過程についての事例を検討する。まず，活動を通して自尊感情が育まれた事例である。中学校 1 年生で，小学校 5 年生から日本に滞在する生徒の事例である。日本語は堪能に話すが，文字が十分に書けない，計算が極端に苦手であり，小学校の時は通級指導による特別支援を受けて学習を進めてきた。新しい学習内容が重なると，急に学校を休む傾向があったが，だからといって夜遅くまで起きていること，遅刻についてさして悪いことと考えている様子もないこと，などを改めていく気はないようであった。中学校進学後の日本語教室では，小学校との連絡と担当者の見取りから，まずは宿題の確実な提出に向けた支援を行った。家庭学習は自分のペースで進めることができ，学校での学習内容の定着には欠かせない。しかし外国の学校では宿題がないか極端に少ない上に，担当教師からのフォローアップがほとんどなく，生徒は自学，自習の仕方を指導された経験がない。積極的に日本語や教科の授業内容を学び取ろうという意欲や態度に欠け，さらには自分に必要な学習内容を考えるスキルも十分には身についていなかった。日本語教室での学習は，教科書や補助教材，ノートの種類とその使い方の説明から始まり，文字や漢字の習得におけるドリルの重要性が伝えられた。初めての定期テストでは，教科担当から様々な配慮がなされるが，すべての教科で一けた台の得点であった。そのことを本人がどのようにとらえるか，またその後の取組にどのような変化があるのか，学級担任，日本語教室担当とも注目した。しかし学習態度，生活態度とも何ら変化は見られなかった。

その 1 か月後の心理検査では自尊感情の高さが際立ち，その点について，学級担任は問いかけた。するとその生徒が述べるには，もともと係活動が好きだったが，4 月に出会った別の小学校出身の級友に感謝されたり，ほめられたりしたことがことのほかうれしかったとのことであった。小学校時代には学級担任が係活動や日直業務をこなすごとにほめてくれた経験があったが，中学校では級友から声をかけられるというこれまでにない経験をすることができたのである。

4.2. 同じクラスに所属する 2 人の外国人生徒の行事体験とその後の進路決定

中学校 3 年生で，2 学期後半に母国より転入

した生徒A（以下，A）と，1週間遅れで転入した生徒B（以下，B）の事例である。同じ学年の学級の生徒数のバランスから，二人とも同じ学級に入った。二人とも全く日本語が話せず，日本の文化についての知識はほぼ皆無だった。日本語指導を週8時間程度受けながら，他の時間は学級に入り，他の日本人生徒と同じ授業を受けていた。二人とも日本には保護者の仕事の都合で来ており，日本語を学ぶ動機づけが弱かった。それでも日本語教室では二人は質は異なるが，それなりに努力する姿勢が見受けられ，教室での授業では学級全体の学ぶ雰囲気を壊すような態度は一切取らなかった。そうした態度もあってか，半月経過したころには，本人は英語が話せないにもかかわらず，多くの生徒が英語で話しかけたり，校内のことや授業のことなどを身振りや手振りを交えて教えたりするようになった。Aは明るく，笑っていることが多く，Bは困っていないと自分からは話しかけないが，親切にしてもらうと必ず感謝の意を表した。

そうしているうちに，11月中旬の文化祭に向けて合唱コンクールの練習が始まった。音楽科担任教師によれば，Aは音楽的な素養があり歌が好きであり，Bは国民性もあってのことか，大変リズム感がよいとのことで，聞き覚えで合唱練習に参加するようになった。しかし楽譜上の，強弱などを示す表情記号を解することができない上に，周囲と合わせて歌おうとする意識に欠けていた。他の生徒とあわせて強弱をつけたり，曲想の大きな変わり目で声質を変えたりすることができず，二人の声が目立つことが多かった。初めは二人の参加を喜んでいた生徒たちも，様々に手を変え品を変え本人に要求したり，助言したりしたが，了解したしぐさを見せるのみで，変わることなく半月が経過しようとしていた。様々な意味でAとBは一気に存在感を増したと言える。

その間，学級担任教師は歌詞の解釈を深める材料を提示したり，生徒たちが決めた昼休みの練習には必ず参加して，時に厳しく学級全体の練習態度を叱責したりしていた。小さなことであっても，ものごとに真剣に取り組むことに価値をおく担任教師は，その理由として学級経営における学級全生徒の一体感を挙げていた。4月当初より，一部の生徒の問題行動も学級全体に投げかけ，それぞれの立場で何かができたのではないか，と問いかけ，その場で意見を出させたり，帰りの会では時間をとって生活日記を書かせたりしてきた。そうしたこともあってか，2学期初めの体育大会は9クラス中，全く入賞しなかったが，学級生徒の達成感や満足感は大変高いように見受けられた。

そんな中，給食後の昼休みの合唱練習で，指揮者が演奏を止めて改善点を指摘した。その際，AもBも気づくことなくしばらく歌い続けたので，学級代表たちが止めて指揮者を指差した。それにもかかわらず歌い続けようとしたことで，担任教師は大きな声で二人を叱った。指揮者の横に出てくるように指示し，すべて日本語で二人の行動のいけないところを注意し，どうしてほしいか伝え続けること15分におよんだ。当然，午後の授業の開始を知らせるチャイムも鳴ったが，担任教師は止めなかった。AとBはもちろん，生徒全員が驚き，真剣な表情で担任を見つめ，静かに聞き入った。AとBはすまなさそうであったり，困惑の表情やジェスチャーを表したりしていた。その場は学級担任教師と授業の教科担任教師が交代することで終わった。

交代した教科担任は日頃からこの学級担任の学級経営手法を高く評価しており，この後の授業時間を生徒に任せた。話し合う論点は「学級担任はだれに何を伝えようとしたのか」「学級担任の思いにこのクラスが応じるには，だれが，何をすべきか」の２点であることを伝え，教科担任は教室の後ろに着席した。一気に生徒はそれぞれの思いを口々に伝え合った。しばらくして大きく３つのグループに分かれて話合いは続いた。一見して，学級代表を中心とするグループとＡとＢを囲んで，話し合いながらＡとＢに英語で伝えるグループ，それ以外のグループといった様子であったが，「それ以外」が必ずしも意欲に欠けたり，関係のないことをしたりしているわけではない。確かに活発に話し合っているわけではなかったが，顔を上げ，楽譜を指したり，発言したくて挙手したりしている生徒もいた。この時間は約 30 分続き，全体で話し合ったり，結論を出したりするところにまでは至らなかった。

この日の放課後，学級担任教師が驚いたことに，学級代表や指揮者たち数名がＡとＢを伴って現れ，二人も含めてそれぞれが謝り，今後どうするかを伝えた。実のところ，ＡとＢが話す内容はだれもわからなかったが，その表情やジャスチャー，他の生徒をまねてか頭を下げる様子から，何か申し訳ないことを伝えていることは十分に理解できたとのことであった。本人の回想によれば，この時，学級担任教師は聞くことを心がけ，こうした一連の行動を称賛しながら，学級全体でこのことを共有するよう促した。この日を境に学級担任教師は合唱練習では何も語ることなく，徹底的に生徒に任せた。およそ 20 日後に開催されたコンクールでは，このクラスは３位入賞を果たすことができた。二人とも宗教上の理由から，土曜開催によって保護者へ積極的に公開しているこの行事を当初より欠席することを表明していたが，大会直前にそれぞれが，別々に参加する意思を学級担任教師に伝え，実際に出場したことを付言する。

さて問題としたいのは，これら一連のできごとが，ＡとＢの進路選択にどのような影響を与えたか，という点である。つまり進路選択時に，所属学級であるこのクラスにおける特別活動，合唱コンクールをめぐる取組をＡとＢは，それぞれにどう語ったか，という点である。「特別活動が外国人生徒である二人にとってどのような機能を果たしたのか」ということは，在日期間がごくわずかであった二人にとっては，ある意味で日本社会とはどのような場であるととらえたかを語り，ひいては大変ローカルな事例ではあるが，「日本の学校文化がどのようなものであるのか」ということの一端をあぶりだすことであろう。なお以下のＡとＢの語りは，通訳を介して数回にわたって日本語教室の合間などに行われたインタビューの内容である。

Ａは，学級担任教師が叱った時に，なぜそんなにもコンクールに熱心なのか不明であった。他人のことにあまりに一生懸命なことに率直に驚くとともに，日本語がわからない中，自分も合唱に参加しようと努力していた。続く話合いも，級友が何をしているのか，自分に何を伝えようとしているのか，全く理解できなかった。さらに帰りがけに学級担任教師のもとへＡもＢも含めて行くことになったことが驚きで，日本では教師と話し合わないと何も進まないのか，自分たちが行ったことがなぜそんなにも級友に大きな影響を与えたのか，と思った。翌日からの練習ではまず気を付けたのは，練習でいかに級友のじゃまをしないか，という点であった。

授業の数倍，集中して練習に臨んだが，自分の取組の変化を近くで歌っている級友以外も常に気づいていたのには驚いたし，ほめてくれているようでうれしく感じていた。合唱コンクールという特別活動を通じて感じたことは「学級の仲間として認めてくれた」ことであるという。みんなのやっていることに熱心に参加すれば，「必ず見ていてくれ」て，「話したこともない級友も何かを伝えてくれるのがうれし」く，「知らない国へ来た不安を感じな」くなった。

ではその後２か月を経て本格化した進路指導である。進学してまで勉強したくないと感じていたＡは，転入時から「就職」を強く希望していた。翻訳された面接時の想定問答集に家族と相談して書いてくるよう指示し，模範的な回答と照らし合わせて，それらの回答がなぜ模範的と言えるのか，学級担任教師と進路指導担当が通訳を介し，数回にわたる集中的な個別指導を行った。かなりの時間を要したので，A 自身による回答の書き直しはできず，その後はまさに模範的な回答の暗記の訓練の毎日となった。学級担任による個別指導には限りがあるため，学級活動の時間を用いて，生徒同士が面接官役と受験者役を交代で務めて練習をする中で，自然とＢには常に複数の生徒が相手をし，面接官役を免除されて回答文の暗記のドリルを繰り返し行うことができた。当日，面接会場は就職を希望した土木事務所，まさにその場所，であり担任教師とともに入ってみると，中年以上の多くの労働者が一斉に二人を注目した。もしかするとこの体験は，本当の意味でのＡにとっての異国文化への入り口だったのかもしれない。オリンピックや万博を数年後に控えた特需の時期も幸いして，結果は合格であった。少々日本語ができなくても，労働力を確保したい会社側の意向が強く反映した面接であったことは予想に難くない[5]が，それにしても全く一人での面接試験をどのようにのりきったのであろうか。

A によると，「担任教師と級友からの多くの支援に応えたいという気持ち」と，「暗唱文の意味がわかっていなくても，面接官は少なくともその努力はわかってくれるのではないかといった希望」があったのだという。まず前半部分からは，主に特別活動を通じて，教師や級友とのつながりが深まったことがうかがえる。孤独な面接にあっても，大きな励みになったことだろう。後半部分の背後には，合唱コンクールの練習の場での経験があるとは言えないだろうか。ただでさえ人生経験が少ない中学生である上に，異国である日本に滞在していた期間は極めて短い。日本での経験をすぐ目の前のことに結び付けて考えようとすることも十分に考えられることであろう。いずれにしてもＡが日本の学校での少ない経験から，特別活動で身に付けた資質を自分のキャリア形成，進路確立に生かせたと言えるのではないだろうか。

一方Ｂは，残り少ない中学校生活を，A とは対照的な体験を重ねることで送っていった。合唱コンクール後となると，3 年生は進路の確立に向け，受験勉強が公私の生活の大部分を占めるようになる。B が尊敬する父は自称，国際弁護士であり，その影響で公民の授業に強い関心を示した。取り出しの日本語教室では，社会科の授業を当てないように強く希望した。本人は定時制高校への進学を望んで努力を続けた。しかし父は全く希望を聞き入れず，自分が探してきた「学校」への進学以外は受け入れないと家族や学校側に伝えた。担任教師はＢの言い分をよく聞き，説得の方策を相談した。父が勧める「学校」は，英語教育に力を入れた宗教系の教

育施設で，高卒の資格のあるものに入学資格を与えるものであった。まず正しい情報と日本の教育制度の説明からと考えた学級担任は資料を作り，重要な部分を翻訳してもらい，数回家庭訪問を試みるが，本人以外のだれにも会うことができなかった。その数日後から全く登校しなくなり，通訳から家庭へ電話をしてもらうと，その応答の概略は「とにかく家庭の状況が恥ずかしくて担任教師に顔向けできない[6]」「あんなに合唱コンクールで全員のために動いてくれる先生だから，担任する全員に同じようなことをするとすれば，自分だけに迷惑をかけすぎている」「団結している級友の中に，迷っている今の自分は入れない」「自分の進路は家族と話して何とかする」とのことであった。当該学年にかかわる教師たちも，だれもが全く予想外の反応であった。家庭内でのやり取りは知る由もないし，それぞれの家庭の目には見えない価値観や歴史といったものに敬意をはらわなくてはならない。教師集団が何より驚いたのは，B が，世間一般に流布しているBの母国の国民性とはおおよそかけ離れた言葉や表現を使って，担任教師と級友に感謝し，さらに思いやるような，また団結に何らかの価値をおいているような話をしたことであった。ここでは一般的に指摘されている国民性と個人の価値観の齟齬は問わないとして，B は特別活動から何を学んでいたと考えられるのであろうか。

それはつまり「一つの目標に向かって，時間を費やして活動する自立する集団のあり方」とでも述べるべきものではないだろうか。また「信頼ある教師とともに，進路選択とその確立という極めて個人的な問題を解決していく関係性」とも言えるかもしれない。またあるいは「高い目標を掲げる集団の，よりよい一員になろうと行動することで，自他ともに成長していく仕組みとしての特別活動」とは言いすぎであろうか。B の母国の学校は 2 部制，ところによっては 3 部制をとり，学校の選択は保護者が行うので，教師と生徒の関係は日本に比べて極めて限定的なものかもしれない。また授業日数の 4 分の 3 で進学できるため，欠席や遅刻の届け出が厳格でなく，「出席率」という考え方が存在する国の学校にあっては，また宿泊を伴う集中的，共同生活的な行事がないことに鑑みれば，級友と共通の目標の実現に向けてかかわりあいながら努力を継続する，という経験自体がBにとって稀有であり，強く印象付けられた結果の発言となったのかもしれない。

しかし残念なのは，おそらくは転入の時期が遅かったことでさらに他の生徒とリレーション，かかわりあいを深められなかった点であり，自己開示をするところまで至れなかった点である。それがゆえに特別活動における大切な学びに至り切れていないように感じられるのである。そのことは例えば「…（担任に）自分だけに迷惑をかけすぎている」「団結している級友の中に，迷っている今の自分は入れない」「自分の進路は家族と話して何とかする」といった発言に表れている。学級担任からの進路指導は、生活指導・生徒指導あってのものである。本人と家庭との関係の調整役を果たさねばならないことは，ごく自然にあることである。無論，通訳を介さねばならないことから，時間の調整など負担感は拭いきれない部分が残るだろうが，こうしたことは日本人の他の生徒でも起きることである。また「迷っている自分」を開示できるほどの関係に至れていなかったこと，他のだれもが迷いながら，しかしまとまっていることを知らなかったこと，迷っている自分を開示することでお

互い様とでもいうべき関係に至れる可能性があったこと，家族と相談する前に級友の進路の決め方や価値観を参考にする機会がなかったことなどが，発言からうかがえる。学習指導要領の「特別活動」中の学級活動（2）も含めた学級全体への進路指導や，進路を話し合う保護者との面談の機会や理解できる日本語能力がなかったことが残念である。

なおBは卒業式の日の夕刻，卒業証書を取りに学校へ来ることができたことを付言する。

4.3. 体験学習，社会教育施設訪問の教育力とキャリア形成力

中学2年生1学期に転入してきた事例である。突然に保護者の都合で日本に移住することになり，日本については何一つ知らないまま転入してきた。週5時間程度の日本語教室での学習を，教室での時間割授業からの「取り出し」形態で行いながら，他の時間は所属クラスで授業を受けていた。母国での成績はよかったとのことであったが，それを裏付けるように学習意欲や日本語習得のスピードは速かった。しかし通訳も兼ねる語学相談員には，母国での宇宙に関する研究の夢が断たれた無念を繰り返し語っていた。そして転入して約3か月後に，勉強する意義や学校へ通う意義が見いだせないとのことで，1週間全く登校しなかった。そこで担任教師は，プラネタリウムを併設する隣市の科学館へ生徒を誘った。保護者も同伴し，あまり言葉が通じないながらも，数多くの展示物や参加型のアクティビティ，そして何よりプラネタリウムと，本人は夢中で半日を過ごした。このことがきっかけで，日本の宇宙産業や宇宙に関する高等教育などをインターネットで調べ始めた。その結果，むしろ母国より教育の場が充実しているようだと感じるに至り，学習意欲を再度，高めていった。

この事例からは社会教育の場が，外国人生徒のキャリア形成に大きく役立ったことがわかる。この生徒の担任教師は，休日に訪問したが，もし総合的な学習などの授業時間でこうした場を含めた社会見学が実現するなら，総合的な学習そのものの質の向上にもつながり，生徒にも学校側にも互恵的な学習活動の実現となるだろう。この事例の場合は，生徒の側に自分のキャリア形成上，関心が明確であった点が特徴的であると言える。ぜひともそうでない生徒のキャリアに関して開発的な指導の場となる社会教育施設の開拓とともに，その場での学習内容を複数の言語で文字化していく努力を期待したい。

5. 今後の課題－まとめと考察－

わずかな事例数であるが，前掲の外国人児童生徒たちの体験が共通に語りかけてくることとは何だろうか。

その一つは特別活動と総合的な学習それぞれの特質を生かして，キャリア教育や進路指導に貢献していくことであろう。それにはより多くの事例を集めて，精査していく必要がある。こうしたことは，どちらかの授業がどちらかの授業にもたれかかっては本末転倒なのである。どちらかの授業を充実させるために，どちらかの授業をいびつにしてしまうことのないように，その意味でも特質と外国人児童生徒のキャリア形成につながる授業効果の精査が必要なのである。このことの必要性は，来年度より小学校では完全実施となる次期学習指導要領に「学級活動（3）」が新設されている点からも際立っていると言わねばなるまい。日本語をあまり理解しない外国人児童生徒のキャリア形成に「学級

活動（3）」はどのような可能性を秘めているのだろうか。外国人児童生徒のキャリア形成の中心となる教科・領域とは何であり，どのような教科・領域，あるいは個別指導と組み合わせるのが効果的なのであろうか。果敢な実践研究が待たれる。

二つ目は，日本語でのコミュニケーションの重要度の異なる活動の組み合わせである。日本語の習得がキャリア形成に影響し，ひいては高校での授業の理解度にかかわる点から論を起こしたが，煩雑に感じられる訓練に終始せず，自然な会話から学びを促進したり，学習の意義をその子どもなりにつかませたりする方策の一つとしてのキャリア教育を成り立たせるために，授業はどうあるべきか，ということとも言い換えられよう。

三つ目は，日本人児童生徒との交流で促進されやすいキャリアと，外国人同士の交流されやすいそれとの異同を明らかにすることである。このことが実現すれば，学習形態・方法の選択が容易になり，計画的な実践に結びついていくことだろう。

以上，外国人児童生徒を中心に論じてきたが，これらのことは日本人児童生徒の側からも得ていることが大きいことも忘れるわけにはいかない。この点については稿を改めることとする。

注

1　主な担当箇所は1章（犬塚・天野），2章（天野），3章（天野），4章（天野）である。

2　文部科学省（2019）外国人児童生徒受入れの手引き改訂版
（http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm（2019年8月30日取得）

3　文部科学省（2016）学校における外国人児童生徒等に対する教育支援の充実方策（外国人児童生徒等に対する教育支援に関する基礎資料
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/06/__icsFiles/afieldfile/2016/06/28/1373387_03.pdf
（2019年8月30日取得）

4　外国人児童生徒の中で，日本語の理解が不十分な者はまず学校で「学習用語」としての日本語や「教授用語」としての日本語と出会い，その理解度が通常授業の理解度に大きく結びつく。また会話分析が明らかにした通り，学校における教師と児童生徒の会話の関係性は，社会における会話のそれとは大きくかけ離れている部分が存在する（山田ら1999）。例えばそうしたことが，日本語習得をさらに難しくしているだろう。

5　ハローワークを経ての就職選考であったが，学校間の取り決めである合格発表の時期を待たず，社長は面接その場で即，合格を言い渡したほどであった。

6　通訳に何度か確認したが，「恥ずかしい」という日本語が最もあう言葉が使われたとのことであった。後出の「団結」の語も同様。

引用・参考文献

荒牧重人ら，2017，『外国人の子ども白書－権利・貧困・教育・文化・国籍と共生の視点から』，明石書店
江原裕美ら，2011，『国際移動と教育－東アジアと欧米諸国の国際移民をめぐる現状と課題－』，明石書店
藤田晃之，2014，『キャリア教育基礎論－正しい理解と実践のために－』，実業之日本社
日本国際理解教育学会編著，2015，『国際理解教育ハンドブック－グローバル・シティズンシップを育む－』，明石書店
二宮皓ら，2006，『世界の学校－教育制度から日常の学校風景まで－』，学事出版
佐藤郡衛，2001，『国際理解教育－多文化共生の学校づくり－』，明石書店
清水弘美，2018，『小学校「特別活動」の年間指導モデル』，学事出版
下村英雄，2009，『キャリア教育の心理学－大人は子どもと若者に何を伝えたいのか－』，東海大学出版会
田島元信ら，2008，『文化心理学－朝倉心理学講座11－』，朝倉書房
玉井美知子ら，2006，『ホームルーム活動－理論と実践－』，ミネルヴァ書房
山田富秋ら，1999，『会話分析への招待』，世界思想社